

あたり

閉院のご挨拶

高知県立芸陽病院は精神科単科の県立病院として診療を行なってきました。今回地震対策の改築を機会に、あき総合病院の精神科として再出発します。病院は約50年前に精神衛生法に新しく定められた県立精神科病院として、そして県東部の精神科医療を担う目的で造られました。当時土佐山田町(現に東に精神科がなかったため安芸市に作られた)です。国道も整備されてきたが、今でも県の東の端の東洋町から片道2時間程度かかり、住民にとってその重要さは昔と変わりません。半世紀にわたり、地域の皆様に芸陽病院を支えていただき厚く御礼申し上げます。新病院では規模は縮小しますが親切で質の高い精神科医療を提供してゆきたいと思えます。総合病院になり、身体病気を抱えた方々の治療も上手にいくと期待しています。新病院にご期待ください。



院長 山下 元司

芸陽病院への想い

私は山下院長と共に平成8年8月1日に着任しました。当初は先輩達人の卓越した精神科看護技術を目の当たりにして、自己の未熟さに戸惑いがあったことを思い出します。先輩から伝授された看護は今も引き継がれています。単科の公的な精神科病院としての役割を終えることに寂しさはありますが、今後先人たちの精神科看護への篤い思いを引き継いでいかねばなりません。私達は精神科看護師の「常識」に固執することなく社会に開かれた意識を持ち、誰もが気軽に受診していただけるように、ぬくもりのある診療科を目指してまいります。芸陽病院の閉院にあたり、関係者の皆様にはご理解とご協力を賜り感謝いたします。



看護部長 西田 初美

新体制に向けて

4月から新しい体制になります。8月には新病棟も完成の予定ですが、この一連の変化の中で最も大きいのは、単科の精神科病院から総合病院精神科になることだと思っています。身体科との連携が必要なケースにおいて、よりお役に立てれることでしよう。

もちろん自治体病院として地域の精神保健を担う医療施設としての役割を果たしていくことになりました。私自身、この大きな変化の流れに立ち会うことにとってもドキドキしています。



副院長 山内 祥豪

閉院に寄せて

芸陽病院は昭和31年に県立芸陽院として開院し、56年の長きにわたり高知県の精神科医療を支えてきました。また公立の精神科病院としては数少ない黒字病院として、長く経営黒字を続けてきました。事務部長として昨年4月にきた私は、職員の方の多くが経費の削減に取り組んでおられたことに感心するとともに、経営黒字を続けていることが職員の経営意識から来るものであろうと思いました。また、外来や入院病棟での患者さんの立場に立った対応や前向きな姿勢に病院職員として嬉しく思いました。4月には「あき総合病院」として新たな一歩が始まります。統合しても今の姿勢を崩すことなく、皆さんと一緒に良い病院を作っていくかと思っております。



事務部長 福井 尚仁

ひとときを想う

春の芽生えの時期になると、色々の想い出が走馬灯のようにかけめぐります。安芸への通勤は四季折々の自然の変化が車窓から眺められ、とてもすばらしく飽くことがありませんでした。清々しい心で患者様と接し、職員の皆様とは良い人間関係が保てることができ、とても充実した毎日でした。看護職に従事する皆様、どうぞ胸を張って良いお仕事に励んでください。



元 総婦長 野村 重子 氏

芸陽病院閉院に寄せて

私が芸陽病院に転動したのは平成9年4月でした。周りの山々は新緑に覆われて気持ちよい風が吹いているのに、病院の中は妙に薄暗く、どんよりとした空気が漂っていました。まだ畳部屋が残っていました。看護師が「びつくりされた様子で、私たちが患者さんにもこんなところにいるのです。」と哀しそうな眼をしたことが印象に残っています。国の精神科医療政策や県立病院改革に翻弄されながらも、はつきりと芸陽病院には使命がある、ということが分かっていました。そしてそこには現場の地を這うような努力があったことを忘れません。56年の歴史の一端に勤務させていただきましたことを心より誇りに思います。そして閉院に当たってご苦労された山下院長先生はじめ西田看護部長さんスタッフの皆様にご感謝申し上げます。皆様の新病院での活躍をお祈りいたします。



元 看護部長 坂本 佳 氏

移り変わり

芸陽病院は木造建築の時代、現在の建物、今度の新建築と三代になります。木造の時の建築は口の字型で、全ての建物が中庭に面していて、患者さんや職員が中庭を介して触れ合うことができました。現在のコンクリートの建物は冷たく、各病棟が孤立した感が拭えません。O.Tホールでのイベントがコミュニケーションの場として重要視されました。新建築新制度になってからの病院のありかたに皆さんの知恵を絞ってください。



元 副院長 横田 修 氏

昭和

History

県立芸陽病院 56年の歴史、そしてこれからの展望。

- 昭和31年4月1日 県立芸陽院(50床)を設置し診療開始
- 昭和31年9月1日 診療棟及び第二病棟(42床)完成
- 昭和32年1月7日 保護病棟(8床)及び廊下完成
- 昭和34年3月30日 作業・合併症病棟完成
- 昭和37年3月25日 診療科目に神経科を加える
- 昭和38年1月21日 安芸病院伝染病棟転用による増床(33床)
- 昭和40年3月31日 社会復帰棟(レク作業ホール)完成
- 昭和43年3月20日 第7病棟・社会復帰棟完成
- 昭和49年3月1日 精神科作業療法施設基準認定
- 昭和63年4月1日 県立芸陽病院に名称変更

平成

- 平成2年4月1日 テイクアの実施承認
- 平成4年6月1日 児童思春期外来(あつるクリニック)開設
- 平成5年8月31日 作業療法棟・厚生棟・合併症病棟完成
- 平成11年6月1日 本館及び病棟改修
- 平成11年12月10日 入院時食事療養費特別管理加算認定
- 平成11年12月10日 応急入院指定病院に指定
- 平成15年4月1日 病棟再編(4↓3病棟、193↓153床)
- 平成15年5月1日 女性外来開設
- 平成15年10月30日 臨床研修病院(協力型)指定
- 平成17年11月21日 (財)日本医療機能評価機構認定
- 平成20年3月12日 新給食システム導入
- 平成22年11月20日 (財)日本医療機能評価機構認定失効



芸陽・さまざまな思い

昭和37年10月〜平成7年3月退職までの32年6ヶ月を精神医療・看護に関わってきた。私の就職した頃には、山本病院も芸西病院も開設されておらず、定数100床に20〜30名が入院していた。医師・看護師等も少なく、病院は治療と看護が中心であった。それでも医師を先頭に「レク療法だ」「作業療法だ」と皆、頑張っていた。また座敷牢に入れられ、手足が拘縮し歩行困難な患者の入院もみられた時代もあった。それから7年近くの歳月が流れ、平成7年の精神保健福祉法により、国の精神障害者に対する施策も進み、明るい兆しも見えてきた。住み慣れた身近な地域で医療・福祉や介護・就労支援等、患者の心に届く、また家族の心に届く精神科医療の拠点となることを心より期待する。



元 総婦長 永田 清子 氏

芸陽病院の思い出

私は昭和から平成に変わる時期に院長として勤務しました。年が若すぎて、最初は院長心得という身分でした。スタッフの皆さんに温かく迎えられ仕事ができることが記憶に残っています。地域精神医療の発展を目指し、外来やデイケアに力を入れました。保健所とケース検討会を行ったり、安芸高校に精神保健の授業に出かけたりして地域とのかかわりを広げようともしました。僅かな期間でしたが、安芸地区の精神保健に関われたことに感謝しています。



元 婦長 千光士 京子 氏

在任中の出来事

在任中(平成3年1月〜平成8年7月)の出来事を記します。当初驚かされたのはパソコンの持ち込みができなかったことで、「持ち込みは私物でも組合の許可が必要」と言われたことです。

各病棟(週1回)、幹部会(月1回)、医局会(週1回)、幹部会(月1回)、あつるクリニックの開設、高知県で最初の児童精神科クリニックで、子供も出入りできる精神科病院を意図しました。音楽療法コンサート(月1回)最初はドイツからのウトルマーカンマーアンサンブルで、これは高知県知事・安芸市長も参加されました。これを契機として、県内でもあちこちの病院でコンサートが開かれるようになりました。その後、手しごと交遊会議との交流も始まり、メンバーによる実演協力や伊尾木青年団による沢山のオブジェの貸与なども忘れられないことです。今後、新築される総合病院精神科として、よりよい診療体制の中での皆様の活躍を期待しています。



元 院長 井上 新平 氏



元 院長 高坂 要一郎 氏

今後

- 平成24年4月 県立芸陽病院は県立安芸病院と統合し、県立あき総合病院として県民の皆様への精神保健の向上に努めてまいります

県立あき総合病院 完成予想図



※北側=精神科病棟他を予定

寄稿

県立芸陽病院 閉院に寄せて

歴代病院長・看護部長他